

---

随 想

---

## 共 同 研 究 会

池 上 平 治\*



先日転居をした際、本の整理をしていたところ昭和 19 年の「鉄と鋼」が出てきた。珍しいので思わず見てゆくうちに、戦争末期であつたために、第 7 号までは年内に発行されたが、第 8・9 号は 1 冊にまとめて戦争終結の翌年、すなわち 21 年の 1 月になつてしまつたことがわかつた。これを拾い読みしたら戦争末期から終戦後にかけての鉄鋼協会の活動がわかつて大変面白かつた。

第 6 巻の巻末の会告欄には、例年 6 月会費請求のところ、用紙印刷不如意のため、非常に後れ 10 月下旬請求致します故 11 月中に必ず納入下さい、とある。敗戦の色濃かつたこの頃、用紙が手に入らず担当の方々が大変苦勞していたことがわかる。

第 7 号の東京地方講演会（昭和 20 年 1 月 14 日）の案内の末尾には、警報発令中は中止、但し当日午前 7 時迄に解除の場合は予定通り開会す。又当日午前中に解除の場合は午後のプログラムを実施す。昼食弁当は各自持参の事である。空襲におびえながら、それでも活動が続けていた様子がよくあらわされていると同時に、食糧に苦勞した当時が偲ばれて面白い。

更に第 7 号の会告によると、19 年 11 月末印刷所が焼け、第 7 号は発送間際に全部烏有に帰し、第 8 号以下の原稿、校正刷は毀損或は散逸、図版は焼けて不用になり、用紙も灰燼になつた。協会当事者は編輯委員各位にはかり印刷所関係者とも協議して八方手を盡して会誌の遅延を挽回すべく、懸命に努力中につき今暫く御辛抱をお願いするとある。こうした必死の努力にもかかわらず第 8 号はついに戦争終了まで発行できなかつた。第 8・9 号という形にまとめられて発行されたのは昭和 21 年 1 月である。

しかし、これより先、昭和 20 年 12 月 8 日に第 1 回の東京地方講演会が有楽町の帝国交通協会の大講堂で、国民全体が敗戦と飢で虚脱状態にあつた戦後の混乱の中で開催されている。

戦争末期から戦後にかけて、家は焼かれ、物資はなく、生命をつなぐのにやっとであつた時代に、日本鉄鋼業の発展のために、あらゆる手段を講じて活動を続けようとした当時の協会関係者のご努力にはただただ頭が下がるばかりである。

あれから 24 年の歳月が流れた。

戦争によつてほとんど壊滅状態にあつたわが国の鉄鋼業も奇蹟的に回復したのみでなく、年々めざましい発展を示し、昨 43 年度の粗鋼生産高は 7000 万 t になろうとし、米国、ソ連について世界第 3 位しかも第 4 位のドイツをはるかに引離すという躍進ぶりである。

鉄鋼業の今日までの拡大を当時誰が予想したであろうか。

この原因についてはいろいろ挙げられているが、この拡大を支えてきた技術の進歩は無視できないであろう。

---

\* 本会理事 日本鋼管(株)技術部長

年間 1 千万 t の粗鋼生産を 4 基の高炉で実現させうる大型高炉の技術、世界中の先頭を切つて進んでいる純酸素転炉製鋼技術などである。

これらの技術は何によつてもたらされたものであろうか。一般には外国技術の果敢な導入にありといわれている。しかし外国技術の模倣、消化だけでは、ここまで来ることはできなかつたであろう。やはり先進の技術を消化して、自分のものとすると同時に、更に自らの技術が加わつたからに違いない。そうでなければ、たとえば大型高炉のごとく、外国より先に出ることはできなかつたであろう。

世上ともすれば、日本人に独創性なしという声が聞かれる。しかし技術の発展の歴史を見ると新しい技術がなんらの前触れなしに忽然と生まれる場合はきわめて稀であつて、大多数の発明は過去の技術の蓄積の上に咲いた花のごとき場合が多いようである。日本人の場合にあつても独創的な芽をはぐくんでくれる環境がありさえすれば、独創的な研究も育ちうるのではないであろうか。これまでの日本経済の後進性、底の浅さ、そのための変化の速さ、このような環境が研究者自身の研究態度を独創的なものより手取り早く成果の挙がる改良の方向に向かわせたことはなかつたであろうか。

戦後の技術の進歩に貢献したものに共同研究会が挙げられる。

共同研究会といえば、昭和 23 年頃の製鉄部会のことを思い出す。敗戦によつてほとんど全滅に近かつた高炉も、この頃になると数基復旧されていた。この頃は部会に参加していた会社も少なく、集まるメンバーも 20 名前後で会場は各社の寮が多かつた。議題は最初の間、こういう共同研究のやり方に不馴れなためと、従来の高炉技術者の経験主義の特性もあつて、きわめて身近な日常操業技術の交換であつたようである。しかし集まつた人達の間の同じ道を歩む者同志という親和感、会社は違つていても先輩と後輩の間の身近さは格別で、このような雰囲気は当時若かつた筆者などにとつて、部会に出席するのが大変楽しかつたものである。こういう同じ専門技術者の全国的規模での親しさは、その後の共同研究会の運営の進歩とあいまつてわが国高炉技術を、その後新しく高炉を始められた各社も含めて、揃つて発展させるのに大いに役立つた。新しい技術の導入もその普及はきわめて短期間になしとげられ、各社競つて向上し、いつの間にか諸外国の上をゆくようになった。これによつてわが国鉄鋼界全体が利益をうけたことは言うまでもないであろう。

わが国鉄鋼技術の水準が先進国のそれに達し、もはや導入技術のみに頼ることができなくなり、更に進むことの困難さを増すにつけても、国内における共同研究を各部門にわたつてさかんにする必要を痛感する。

幸い鉄鋼協会の各部会とも毎回参加者 100 名を越える盛況である。共同研究会活動のますます盛んになることを祈るものである。